

是非に及ばず

—信長の戦いの流儀にみる打算と報い—

細野 哲弘

(株) JECC 代表取締役社長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

手元に「織田信長合戦総覧(谷口克広)」という本がある。それを読むと、この時代の武将は明けても暮れても合戦ばかりやっていたものだと、つくづく感心する。

もとより、戦いはケースバイケースで、場所も異なれば、敵対者の出方、同盟者の動きも様々であった。勝ったり負けたり引き分けたりは、稼業(?)の常であった。信長は、さすがに「修羅場をかいくぐり勝ち抜いて」歴史に名を留める武将であるから、負けよりは勝ちが多いし、大事なところでは勝っている。また、名を成す過程では、仮に負けても決定的な負け方(致命的な敗北)はしていない。

勝負は時の運とはいえ、命のやり取りをする稼業で決定的な負け方をしない、生き延びて次を期すことができるというのは、それはそれで「十分に大したこと」なのである。

何においても天分というものはあるから、天性の武人・武略神域という人物は居るであろうが、やはりメジャーになるには、加えて経験と工夫が大事。



信長像(2017年に入城450年を迎えた岐阜の街には、こんなデザインのパスが走る)

ここでは、信長が「どのように場数を踏んだのか」、そして「それをどう教訓(かて)にしていったのか」を、彼の戦いの流儀から探してみたい。

そう言いつつ、いきなり結論じみて恐縮ではあるが、彼の流儀を一言でいうなら、いわば「ガキ大将」方式。即ち、「①喧嘩(いぐま)は勝てるものだけやる。②勝つために使えるものは何でも使う。③喧嘩の仕方は俺が決めるから、手下はその通りやればよい。」というもの。

まず、①「喧嘩は勝てるものだけをやる」についてである。

信長と云えば、本能寺で非業の最期を遂げるまでは、桶狭間の合戦、美濃稲葉山城攻略、浅井・朝倉攻略、比叡山焼き討ち、長篠の合戦など、時代を画する上手くいった武略の印象が強く、常勝將軍のイメージすらある。しかし、どうしてどっこい、実は結構「負けている」。

戦(いくさ)には軽重があるし、戦闘の数え方に恣意が入るので一概に言えないが、上記の「合戦総覧」や関連の資料などを見るかぎり、ザックリ言って三割がたは負け戦又は退却戦(にげいくさ)である。論旨に矛盾がないよう言い直すと、結構な数の負け戦の経験を生かして、「戦は勝てるように工夫、準備してやる」ということである。こう言えば言ったで、前半生はかなり負けているように思われそうだが、意外にそうでもない。三河の小大名の息子として家督を継いだあと、一族や尾張一国の平定に汲々としていた時期があるが、そもそもこんな段階で負けが混むようでは先に続かないから、むしろこの時期の勝率は高い。問題は、地元を押えて他の列強と相まみえるようになってからである。つまり、地区予選を突破したあと、より上位の大会に駒を進

めて、どう戦ったかである。もともと尾張の軍兵が特別強かったわけではないから、尾張地区大会から天下布武の全国大会に臨んで伸していくために、それ相応の工夫、才覚が発揮されている。

その一つが「情報重視」。

レーダーも通信機器もない時代に、「物見」である斥候役は非常に重要。危機に際して敵前に迫り、敵中にも潜って状況を探ってくる役割は、武勇もさることながら、迅速性、分析力・判断力も求められ、それなりの武者が務めた。

桶狭間の合戦においては清州城を出陣した後も、今川本隊がどの道筋を辿るかに探索力を集中した。ほとんど大将単騎で城を飛び出したものの、その後小半日も「ウロウロ」していたのは、後から駆け付ける兵を糾合する意味もあったが、敵将義元の位置の確定情報を待つためであった。この間、丸根砦、

鷲津砦などが次々に落とされても、ひたすら義元本陣の行方だけを探った。漸くにして田楽狭間で休息という情報に接するや否や、折からの豪雨を衝いて寡勢を錐のように今川本陣に突き立てた。混乱の中で義元的首級を挙げる殊勲の働きをしたのは、毛利新介¹⁾、服部一忠であるが、実は功一等の報償は情報をもたらした武者²⁾に与えられている。なお、信長が敦盛を一差し舞って陣触もしないで城を飛び出したのは、後段で述べる彼の別の流儀のゆえでもあるが、既にこの時代敵味方に入り乱れていた「乱波素波」と呼ばれた忍者³⁾を警戒してのことでもあったとされる。

斥候と云うと、単騎忍びやかというイメージがあるが、信長は早くから蜂須賀小六の川並衆⁴⁾を探索に使ったように、数こそ少人数ではあるが単騎では出さないことが特色。武者に一隊を率いさせて「たくさん目」で直接、多角的に確かめさせるという合理的な方式を取っている。

攻めるにせよ守るにせよ、情報重視の姿勢は、金ヶ崎の戦い（後述）での対応や秘された信玄の死のいち早い探知などに奏功している。

二つ目が「早逃げ」。

武士というのは莊園管理の現場の代官や自警団のような存在から派生してきている。徐々に組織として内部更新のメカニズムや自治機能が働くようになっていくのだが、その前の段階の「一団の暴力勢力」としては、棟梁・頭^{かしら}の存在が決定的に大事。それが倒されると、その勢力の求心力が解けて、総崩れになる。その意味では蜂の社会の女王蜂の存在に似ているし、将棋の王将にも通ずる。大将は状況判断を過たず、とにかく生き延びないといけな。攻



桶狭間の今川義元最期の碑（愛知県桶狭間公園 近くに彼の馬を繋いだという木（ねずの木）があり、無闇に触れると祟りで熱病になると云われている。）



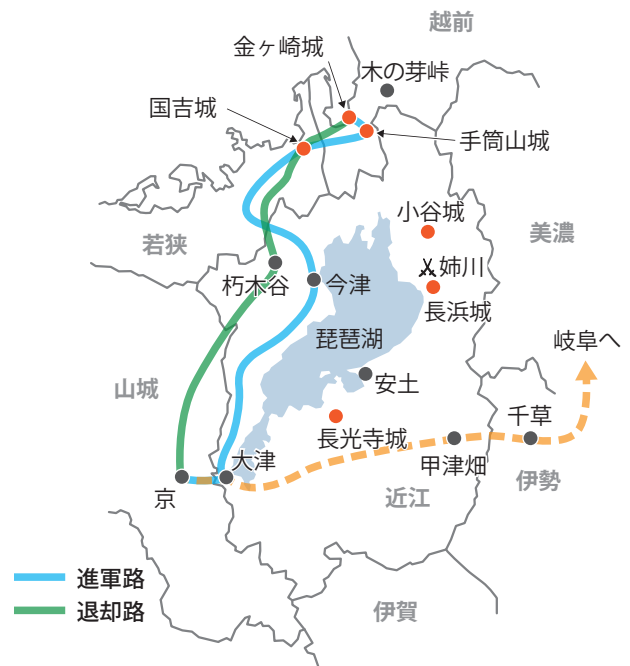
七ツ塚（桶狭間の戦死者を埋葬したといわれる塚の一つ）

- 1) 毛利新介は、桶狭間の戦いでは負傷した服部一忠を助け、今川義元的首級を挙げた。この際、義元に指を噛み千切られたといわれる。桶狭間以後は良勝と名乗り、通称も新介から新左衛門に改めた。母衣衆（注23参照）が選抜されたときに黒母衣衆の一人に名を連ねた。その後、信長の側近の吏僚として尺咫廻番衆（さくきまわりばんしゅう）に属して、判物や書状に署名を残した。本能寺の変に際しては、本来の武人としての本領を発揮して、二条城に於いて奮戦の末に信忠と共に討死した。
- 2) 今川本隊の情報をもたらしたのは築田（やなた）出羽守政綱という説がある。ただ、信長公記などに記録がないため詳細は不明であり、情報収集の経緯を含め真偽不明の「築田伝説」という人もいる。彼は後で話に出てくる築田方正の父親であるとされている。
- 3) 所謂甲賀、伊賀の忍びはこの頃から歴史に出てくる。もともとは甲賀、伊賀地方の地侍の集団であるが、双方に連絡はなく鍛錬した探索の流儀は別々。所謂「忍術使い」のイメージは伊賀に強いかもしれない。忍者の話は面白くて言及しだすとときりがないので信長との関係だけに留めておくが、信長は甲賀とは比較的良好で、伊賀とは敵対することが多かった（天正伊賀の乱など。2017年に映画化もされた「忍びの国（和田竜）」はその攻防を題材にした作品。）。
- 4) 川並衆というのは、木曾川の流通を仕切る海賊ならぬ一種の川賊である。信長は尾張を平定した頃から生駒屋敷（現江南市）を頻繁に訪れている。側室の吉乃の実家である生駒氏は川並衆の「顔」で、油などを商い馬借なども営み、全国からの商人、旅人の出入りが多かった。信長は一種の情報センターとしてそのネットワークを活用していたはず。

防のさなか、利あらずとみれば臨機応変に「退け太鼓」を打ち鳴らすのも生き延びるための大切な術。ここで紹介する「金ヶ崎の退け口」というのは、太鼓を鳴らすどころかモノも言わずに一目散に退いた究極の退却戦のことである。

永禄13年(1570年)4月、信長は徳川家康との連合で3万の軍勢を率いて京を出立し、朝倉討伐に向かった⁵⁾。もともと朝倉家は南北朝時代に遡る越前守護の家柄であり、ときの当主は11代目の義景。「新興の織田、なにをするものぞ」と思ったとしても不思議はないが、1568年に信長が上洛した折、朝倉家にも挨拶に来るよう二度に亘って呼びかけを受けたが、遂に応じなかった。これを叛意ありとの口実にして、押し寄せて来た織田・徳川軍は圧倒的。国吉城(現美浜町)で陣形を整え、打ち掛かった手筒山城、金ヶ崎城はあっけなく落ちた。その勢いで愈々、木の芽峠を越えて朝倉氏本拠の一乗谷へと兵を進めるといふ段になって、信長にとって「驚天動地」の知らせが届いた。妹お市の方の嫁ぎ先で同盟者であるはずの近江浅井長政が「裏切った」というもの⁶⁾。「虚説であろう」と思わず呻いたとされるが、ひきもきらず届くのはそれを認めざるを得ない追加情報ばかり。遠征の途上で、越前と近江の両方から挟撃されては、いかな信長軍といえども苦戦は必至。

信長は「さっさと」頭を切り替えて、撤収、脱出逃避を決断。自らの軍勢を打ち捨て、連合相手の家康への知らせもそこそこに⁷⁾、わずかの手勢だけで戦線離脱。湖東の経路を避け、敦賀から朽木を経て



金ヶ崎の退け口とその後の千草越え

(「朽木越え」⁸⁾)、5日間かけて京まで逃げおおせた。現地には絶体絶命の窮地を担う殿を申し出た木下秀吉を残した。殿軍は立派に撤退戦を戦い抜き、打ち捨てられた他の軍勢も不思議なほど被害を最小にとどめて帰参した。

京に戻った信長とはいえば、そこからが彼の真骨頂。翌日には何もなかったような何食わぬ顔をして御所の視察などに赴き、一週間後には江北の六角氏勢力を躲して伊勢経由で岐阜に戻り、早速反攻の準備

- 当初その出陣は「若狭の武藤氏に不遜のむきあり、これを成敗する」としていたが、武藤氏は土豪に近く、それを討つのにこれだけの軍勢は多すぎる。案の定、それは名目。「敵は一乗谷にあり」であって、当初から越前朝倉氏の討伐が目的であった。
- 浅井長政の裏切りについては、もともと浅井の方が朝倉とは先に同盟関係にあり、浅井長政にお市の方が嫁ぐ際もそれを尊重するとの約束があったとされる。戦国時代のこの種の約束の効力を云々しても詮ないが、長政にしてみれば「裏切ったのは信長の方」と思ったのかもしれない。長政は信長にシンパシーがあり、朝倉との盟約を重んじた父久政との間に葛藤があったとの説があるも、真相は不明。お市の方が夫の苦悩と信長に反旗を翻すことになるとの判断を察知して、両端を紐で結んだ小豆の袋を兄信長に陣中見舞いとして送り「袋のネズミになる」と知らせたとする風説があるが、作り話であろう。
- 徳川家康ほど当時の信長に忠実な同盟者はいなかった。桶狭間の戦いの後なお勢力のあった今川側を離れ、「清州同盟(1562年)」で織田側に組して以降、一貫して忠誠を保った。その後、義元からその名の一字を貰った「元康」から「家康」に名まで変えている。しかし、忠実なあまり、信長に付き合っ「あわや」の目に何度も遭っている。この時もなんとか逃げおおせたが、本能寺の変の折も、上洛のあと少人数で堺において織田側の接待を受けている最中であり、きわどい逃避行(伊賀越え)を余儀なくされている。金ヶ崎での信長の仕業には、のちに大久保彦左衛門が「打ち捨てられた(三河物語)」と憤慨するのだが、家康軍も殿軍の一翼を立派に担ったとの説もある。
- 「朽木越え」には土地の豪族朽木元綱の導きの功が大きい。当初彼は信長を討つつもりでいたが、松永久秀の説得を受けて翻意したとされる。その後、信長の麾下に入り、信長死後は豊臣秀吉に仕えた。小田原征伐にも参加し、朽木谷2万石を安堵されている。関ヶ原では西軍に属したが、小早川秀秋の裏切りに同調したものの、戦後の評定が芳しくなく所領を減らされたりしている。なお、ここで登場する松永久秀であるが、主君の三好長慶を毒殺したり、將軍義輝を暗殺するなど、権謀術数の権化みたいな典型的な梟雄(きょうゆう)の一人だが、信長が上洛するとその配下に下り、この遠征にも信長陣中に入った。のちに信玄と結んで信長に反旗を翻し、最後は滅ぼされてしまうのだが(1577年)、この時は「朽木と若干の面識がある」と云って単身乗り込み、得意の弁舌をふるい朽木を寝返らせたと言われる。



金が崎城址（敦賀市 月見台の眼下には、現在北陸電力の石炭火力発電所が広がる。）

備に取り掛かった。そしてわずか二か月後には姉川の復讐合戦に臨んでいる⁹⁾。

三つ目が「兵農分離」。

歴史の教科書では、兵農分離というと、太閤検地と抱き合わせで紹介される「刀狩り」のことを指すとされている。太平の世には無用の長物である武器を、農民らから回収して仕事に専念させるとともに、不測の反乱の芽を予め摘むというものである。しかし、信長のそれは、田畑の相続権のない農家の二男三男などを集めて、逆にかれらに武器を与えて親衛隊かつ常備軍を形成するというもの。室町時代後半まで、農繁期には合戦を避けるのがマナーであった時期がある。なぜならば、賦役として農民が動員で

きないし、下手に収穫前に合戦なぞして収穫ができなければ、仮に勝っても農民はもとより自分（領主）が困るだけなのである。しかし、戦国の世になると、重装歩兵の正規軍の侍とは別に、まさに軽装の足軽、雑兵をその都度非正規兵として雇うこと（傭兵）が広がってくる。戦乱によって主家が減んだり、領地を失った武士（浪人）が少なからず出たし、「欠落」と云って年貢の負担などに耐えられず村落から逃亡した百姓などがおり、彼らが非正規軍の潜在的供給源になりえた¹⁰⁾。これによって、戦の时期的制約は相当に緩和された。こうした非正規軍活用は、正規軍がプロの職能集団として伝統的な戦い方に固執する傾向を残すのに対し、鉄砲の運用など新しい兵種別の編成には「柵のない担い手」が適していたという事情も関係したと思われる。

信長の兵農分離策は、これを一歩進めて一定の数のアブレ農民を常備軍化し、日頃から訓練を施して戦力を高める効果を狙った。勿論、常備軍の維持、訓練には費用がかさんだが、祖父、父の時代からの蓄積により信長にはそれを支える一定の財政力があつた¹¹⁾。こうした形での信長流兵農分離がいつ頃から導入されたかは定かではないが、本拠を替える頻度の多かった彼がその都度城下町を整備する際、半農の二男三男を新しく武士専門に取り立てて常備軍とし、その宿舎を徐々に近辺に整備していったものと思われる。若い頃から生母に疎まれ、家中にも必ずしも賛同者が多くなかった彼にとって、「うつけ」時代に彼が引き連れていた「悪童」たちは貴重な与党。親衛隊兼常備軍にも随分と貢献したのではあるまいか。

9) 金ヶ崎に残されたのは秀吉だけでなく、殿軍には明智光秀、摂津守護の池田勝正などの名前があり、むしろ彼らの方が「上席」であるので、秀吉が撤退戦を独りで仕切ったというのは些か怪しい。しかし、金ヶ崎城の攻防あたりまでは、「それなりの武将ではあるが、成り上がりのお調子者」との評価でしかなかった秀吉が、死を覚悟した殿軍を申し出たことにより同僚からの評価をグンと上げたことは間違いない。その意味で、金ヶ崎は秀吉にとって織田家中での大いなるジャンピングボードであった。なお、主将逃亡後の撤退軍が慌てふためくことなく意外に損害少なく帰還でき、のちの反攻の余力を残せたのは、殿軍の奮戦もさることながら、内部統率・連絡に欠けた朝倉軍の不手際のお蔭でもある。それにしても、この戦はよく考えると、史上稀に見る「信長、秀吉、光秀、家康の揃い踏み一網打尽の窮地」であり、ここで朝倉軍、浅井軍がうまく立ち回っていたら、そのあとの歴史はわからなかった。このように、金ヶ崎の退け口は話題の多い危機脱却戦であったが、実はもう一つエピソードがある。信長は金ヶ崎の退け口のあと、京から岐阜に帰る際に六角氏勢力を避けて伊勢甲津畑から千草に抜ける経路（千草越え）を辿ったが、その途上、六角氏の意を受けた甲賀忍者に鉄砲で狙撃され負傷するという「あわやの事件」に遭遇している。激怒した織田側必死の探索の末捕えられた下手人の杉谷善住坊は、見せしめに鋸挽（のこぎりびき）の刑に処されている。

10) 戦いの時期と農繁期との関係については、「農民兵の動員のため刈り入れまでは戦闘行為を控える」という制約のある時期があつたのは事実であるが、本文で示したように「非正規戦闘員」の活用によって、農繁期による制約が薄れていった。事実、武田信玄と上杉謙信の川中島の都合5回に及ぶ合戦も、農繁期に掛かるものがあり、また滞陣も長期にわたる事例が見て取れる。これは、「陣夫」として一定の数の農民を徴発はするものの、主力戦力としては農民をあてにしない陣立てをしていた証左である。因みに、「陣夫」とは小荷駄隊などの兵糧運搬に充てられる要員のことで、戦闘員ではない。やや逆説的ではあるが、アウトロー的な非正規兵に奮起を促すには、むしろ収穫の略奪可能時期の方が意味がある場合もあったかもしれない。また、この頃から「苜蓿田」、「麦苗薙」という言葉が戦記に出てくるようになったが、これらは敵の領地に侵入して収穫前のコマや麦を奪って、敵の糧道を細くすることであり、戦術として頻繁に行われた。

11) 三代にわたる織田家財政力の蓄積については、本誌第287号「弾正忠家の台所」参照。

そして「敵を上回る有利な陣容」。

伸るか反るかの一大決戦「桶狭間合戦」は、今川軍二万に対して、織田側は五千とも二千とも言われている。これを切り抜けて以降は、信長は有利な陣容での戦いを旨とし、無謀な賭けを極力慎んでいる。この「有利な陣容」には、兵力で敵を圧倒する動員体勢と新兵器（鉄砲）の導入が含まれる。

攻めるには通常守りの勢力（立て籠もりなど）の3倍ほどの兵力が必要とされるが、信長は十分な準備をし、時にそれ以上の動員配備をかけている。冒頭に引用した「合戦総覧」には夥しい数の合戦の記録があるが、戦は切り結ぶ武者だけではできない。この回数を粛々とこなす兵站力は並大抵ではない。意外かもしれないが、当時は兵糧は自弁（自分で調達すること）が原則。その時代に、軍としてこれを給付する体制を取っただけでなく、長期見通しに立って、予め攻める地の近くに兵糧を備蓄しておくということまで行っている。

こうした差配は緻密でロジスティックな事務対応に長けたバックヤード人材があったればこそである。信長は、武人としてはもとより行政事務能力をも併せ持つ者が好きである。謂わば、専門職志向。部下の評価、登用には結構深い着眼をしている。勢力を伸ばすにつれて格段に増えた他の大名との外交交渉や政治文書のやり取りに対応するため、後で言及のある松井有閑や武井夕庵などを事務吏僚として重用した。ほかに、塙直政（山城守護兼大和守護）や村井貞勝（京都所司代）、西尾小左衛門（兵糧調達・配備に長け、のちに安土城石奉行）などを引き立てている¹²⁾。なお、巷間よく信長は「人の和、情けに欠けた」と言われるが、「情緒的に冷たい」、「人としての共感性に乏しい」というよりは、人を「役に立つか否か」で峻別し、使える者は「手駒としてとことん使い込む」という流儀の

問題なのである。秀吉は信長の機微を取り結ぶのに長け、他方光秀は実直一辺倒で信長の機嫌にそぐわなかったなどと言われるが、存外そうではないだろう。勿論、可愛げのあるなしは大切な要素で、なんとなく憎めない明るさを持った秀吉が随分得をしたという面はあるかもしれないが、どちらも其々に「十分役に立つ男」として評価されていた。

鉄砲の導入も、量においても時期の早さにおいても、他の戦国武将の比肩するところではない。武田を粉碎した長篠の合戦がよく引き合いにされるが、鉄砲の出現はそれが全てを変えたというのは極論にしても、弓槍刀による個人技重視の戦法と陣立編成を根本から問い直させる契機になった¹³⁾。個人技や門閥編成に頼らず、兵種編成による「塊としての機能発揮」に重きを置く兵法は、弓槍刀に比べて比較的習熟度の制約の少ない鉄砲のケースに最も有効であった。更に、例えば槍についても、4-5mに及



長篠合戦屏風図（部分）

- 12) 信長の先手必勝ロジスティック、計画的準備の例としては、武田を攻めるに当たり、早くから調達の達人ともいべき西尾小左衛門を駆使して将来前線にあたるであろう大井川西岸の牧野原城に、8千俵余の兵糧を入れ準備したのが典型（信長公記）。こうした才能の登用のほか、部下を競わせる統率も目を引く。それにしても、信長騎下の武将たちは楽ではない。「手駒として有効であること」を継続的に証明することを強いられた彼らのストレスは、さぞかし大きかったであろう。佐久間信盛父子、明智光秀の場合は措くとしても、一時期光秀、秀吉をも凌ぐ異例の出世を果たした塙直政は、信長の寵を繋ぎとめるために、領地経営に無理を重ねて領民の離反を招き、武功にも焦って、本願寺との戦いで憤死。
- 13) 長篠の合戦では、武田の誇る騎馬武者群が先頭切って襲いかかるも、防馬柵の内側から「三段撃ち」された鉄砲連射の前に次々に倒されたとされている。ただ、当時の鉄砲（火縄銃）は玉込めに時間がかかり（三段にしても）連射は難しかったし、騎馬武者が歩兵の前にいきなり出てくるのも不自然である。確かに有名な屏風絵を見ても、入れ代わり立ち代わりの連射をしているようには見えない。また、信長の鉄砲隊は徳川軍を側面から援護射撃するのがメインで、戦いの命運を鉄砲の運用が左右したとまでする見解に疑問を呈する説がある。しかしながら、いずれにせよ鉄砲の数、運用では信長軍に圧倒的な長があったのは間違いなく、大きな意味のある戦いで鉄砲の貢献という意味では、長篠の合戦はエポックメイキングであった。



当時の鉄砲（火縄銃）（詳説日本史図録・山川出版社より）

ぶ長柄のものを横一線に集団運用し、敵を突くより、上から叩く目的で展開するなどの運用は、同様の戦法変化の一環である。単に武田側が鉄砲を軽視したとか、対応が遅れたという問題ではない。上記の兵農分離、兵糧の計画的配備、更には用兵の革新もそうであるが、要は先進先取の気概とそれを実現できる経済的裏付けの有無の問題であった。

次に、②「使えるものは何でも使う」についてである。

まず「降将の活用」。

征服者としての信長は色々な顔を持っている。最後まで抵抗した者（宗教関係を含む）、裏切者には残忍なほど手厳しい一方、早めに恭順の意を示した者、格別の有能の士には寛容である。

上記の朝倉攻めの一乗谷の攻略から浅井氏の小谷城の攻略まで、なお3年掛かっている。この間、朝倉、浅井両家のいずれからも滅亡までに多くの離反者を出しているのだが、平定後の信長の両家旧臣に対する処遇は至って穏便。浅井の旧臣の磯野員昌は姉川でも織田軍をてこずらせ、最後は佐和山城に半

年以上籠って抵抗したにも拘らず、降伏後許されたばかりか、必ずしも浅井領ではない湖西の高島郡の全体行政を任されている¹⁴⁾。また、他の浅井旧臣も旧領を安堵された者が多い。朝倉の旧臣についてはもっと寛大で、朝倉家中の大身である前波吉継、富田長繁をそれぞれ越前守護代、府中城主に封じ、他の多くの旧臣も安堵している。

もっとも、背景にはやや一筋縄ではない要素がある。征服地の処置については、国情が織田側の流儀・やり方で耐えられるか否かが判断のポイント。磯野の場合は彼の行政能力を買ったためであるが、朝倉の旧臣の重用は、この地には蓮如所縁の吉崎道場（現あわら市）もあって一向宗の一大拠点であることから、織田側の将では仕切りが難しいと考えたからであろう。さすがに、越前の国は旧臣だけに任せておけばよいという訳にはいかない。領内統治を旧臣に委ねるとともに、北近江には羽柴秀吉を、若狭には丹羽長秀を、そして敦賀郡には武藤舜秀をそれぞれ抑えに配した。

次は「部下たらしの官位叙任」。

信長は自らの叙位任官にはあまり関心を示さなかったが、部下にはこまめに官位を周旋している。天正三年、信長は上洛し正親町天皇から勅諭を受けた。勅諭というのは天皇から直々に官位の提示を賜ることだが、信長はこれを辞退し、逆に部下の主だった者を任官させることを申し出て、勅許を得ている¹⁵⁾。

以下は、「天正三年の耳目」における主な対象者と官位又は賜姓である。

松井有閑 宮内卿法印¹⁶⁾

武井夕庵 二位法印

14) 磯野員昌は官吏としての能力を買われ、のちに信長の甥の信澄を養子に迎えている。ただ、晩年に信澄への家督譲りを巡って信長の勘気を蒙り、失脚、出奔した。

15) 織田家中には、他に重鎮の柴田勝家、佐久間信盛などがいるが、天正三年より以前に、既に柴田は修理亮（しゅりのすけ）に、佐久間は右衛門尉（うえものじょう）に任官している。信長の官位は、天正三年の耳目の時点では正四位下弾正忠でしかないが、同年11月には一気に権大納言兼右近衛大将になっている。前年の三月に従三位参議に叙せられたとの記事があるが、おそらく叙任順序の体裁をあとから繕ったものである。その後自身は（のちに返上してしまうのだが）正二位右大臣に任じられ、時期のずれはあるものの、一族の嫡男信忠は従三位左中将秋田城介に、二男信雄は正五位下左中将に、三男信孝は従五位下侍従に、其々任じられている。

16) 法印とは、僧綱（そうごう）の最上位で、法眼（ほうげん）、法橋（ほつきょう）の上。法印大和尚位ともいう。9世紀に空海、最澄、真雅の3人に授けられたのが最初で、官位では従二位に相当。時代が下ってから僧職以外にも多用されるようになった。因みに、松井有閑、武井夕庵も僧ではない。

松井有閑は室町幕府12代将軍・足利義晴とその子・義輝（13代）に仕えたが、永禄の変で義輝が三好三人衆らによって暗殺されると、信長の家臣に転じた。信長入京後には京畿の政務にあたり、織田氏の右筆に任じられて、財務、外交で活躍した。茶道にも造詣が深く、本能寺の変当時は堺で徳川家康歓待のため茶会を催していた。後に秀吉に近づき堺の代官に任じられた。一方、武井夕庵は美濃の守護土岐氏、次いで美濃斎藤氏の道三、義龍、龍興の3代にわたって右筆として近侍。のちに斎藤氏を滅ぼした織田信長に仕えて右筆及び側近官僚（吏僚）となり、松井有閑同様に客の取次や京都の行政官の一員として活動した。二人は、信長が東大寺正倉院の名香蘭奢待を拝受した時には9人の奉行のうち選ばれ、これに立ち会った。二人は、信長が東大寺正倉院の名香蘭奢待を拝受した時には9人の奉行のうち選ばれ、これに立ち会った。二人は、信長が東大寺正倉院の名香蘭奢待を拝受した時には9人の奉行のうち選ばれ、これに立ち会った。二人は、信長が東大寺正倉院の名香蘭奢待を拝受した時には9人の奉行のうち選ばれ、これに立ち会った。

明智光秀 これとうひゅうがのかみ 惟任日向守
やなた 築田広正 べっきうこん 別喜右近
 丹羽長秀 これずみ 惟住
 村井貞勝 長門守
 羽柴秀吉 筑前守
 塙直政 原田備中守
 滝川一益 さこんしようげん 左近将監伊予守

この耳目を見て面白いのは、二人の法印を除けば、惟任、惟住、別喜（戸次）、原田が九州の名族の名前であり、日向守、長門守、筑前守、備中守、伊予守は九州、四国、中国の受領名（国主名）であること。即ち、まだその勢力が及んでいない地の支配権者に任ずる（先行発令する）ことで、「早くその地を平定せよ、平定すればあとは切り取り自在」とばかりに、「目の前にぶらさげた人参」よろしく督励しているように見えることである¹⁷⁾。これらを見るにつけ、信長の武将たちの心安からぬ「勤務状況」のほどが思いやられる。

そして「朝廷、将軍の利用」。

信長は、上洛後も「自分がまだ同輩の中での第一人者であるに過ぎない」ことの自覚があった。少なくとも、まだ畿内のヘゲモニーが定まらず、朝倉、浅井などと事を構えている時期まではなおさらである。武力は圧倒的でも、京では支配基盤のない「おのぼりさん」でしかなく、日常的に訴訟の裁決などを行い、守護の補任権、軍事動員権¹⁸⁾を行使する権力主体である幕府・将軍の存在感については、冷静に見定めをしている。

信長は自ら奉じた将軍足利義昭には幾度となく反抗されたが、辛抱強く付き合っている。さすがに最後は懲りない反乱（反抗）の策動に業を煮やして、

埴島城での籠城反抗を最後に追放してしまうのだが（1573年）、彼にとっての将軍職は他に替えがたい貴重なものであった。上洛に当たって将軍を奉じるといのは、幕府を後ろ盾にすることである。その権威は「成り上がり群雄割拠」の中にあっても、寧ろその中であるからこそ、上洛そのものや要所支配権の獲得¹⁹⁾のための有力な大義名分となつたし、ライバルへの調略の口実づくりにも意味があった。先に紹介した朝倉義景への上洛要請も将軍の名の下に行われている。

歴史の教科書では、義昭の追放で室町幕府が倒れたことになっているが、その追放のあと義昭が毛利を頼って落ち延びる（ホントの「都落ち」）までにはなお3年ぐらいあって、実はその間義昭は京の廻りに居た。信長は、この間将軍職には一定の敬意を示す姿勢を崩さず、追放後もそれまでの反抗の咎を言い募って攻め立てたりはしていない。また義昭の子の義尊を後継にする検討をしたとの説もあるくらい、将軍職には「気を遣って」いる。

朝廷との関係も、是々非々である。正親町天皇に譲位を迫ったり、改暦を提起するなど、彼がどこまで朝廷を尊重する気であったかは極めて微妙だが、そのこととその価値を利用することは別である。進退窮まるような膠着状態の打開などには、「天の声」、「時の氏神」としての朝廷の口利きを、巧みに「頼みまいらせて」いる。

「志賀の陣」というのは、浅井、朝倉、三好、六角、本願寺を一挙に敵に回す「信長最大の危機」と云われるもの。そこにおいても朝廷の仲介を有効に利用している。先に金ヶ崎の合戦で紹介したとおり、本拠を離れて同時に多方面からの攻撃を受けることは、即ち重大危機である。

17) 未踏地（未討地）を宛行（あてが）ってインセンティブにするというのは、決して現在の知行地を「先に取り上げる」ことを意味しない。のちに明智光秀が「馴染んだ近江、丹波を召し上げられ、未踏の山陰出雲、伯耆の国を宛行われた」ことを恨みに思い、それが彼の謀叛の一因であるとする説があるが、それは見当違い。攻略地を平定するまでは当然旧領はそのままである。領地を広げてくれる功労者の実入り結果的に減るといような差配は、基本的にしなかったはずだし、そもそも平定前に領地を取り上げたら、ただでさえ物入りの平定戦の賄（まかな）いができない。

18) 義昭については、信長に担がれた「傀儡（かいらい）」というイメージが強いが、実態は少し異なるように思える。歴史書には、応仁の乱以降幕府権力は衰退し、名目だけになったが如く記述するものがあるが、ミスリーディングである。室町幕府が早くから「公家化」したのは事実であり、応仁の乱以降にその勢力圏が狭まったのはそのとおりであるが、れっきとした武家政権であり、例えば、軍事動員は「将軍のお声がかかり」がないとできない仕組みであった。上記（注7）で家康の信長に対する忠誠のほどを記したが、バイの実態はともかく、信長とて諸々の討伐戦に家康軍を動員するには、将軍の命令を介在させる必要があったことは注目されてよい。つまり、将軍の下では、信長と家康は形式上同格であった。

19) 信長が重視したのは、南蛮貿易の窓である堺や大津、草津などの内外の交易要所の確保。それには、力づくよりも幕府によって代官任命を公許される方が威令がよく行き届いた。

元号が元亀に変わった1570年、信長は摂津石山本願寺と戦端を開き、本願寺に組する三好勢と野田・福島合戦に臨んでいた。これより先、信長は岐阜と京との連絡線を確保すべく、その要路である琵琶湖の東岸（横山、長浜あたり）から南岸（大津、宇佐山あたり）までのルートには城と武将を重厚に手配していた²⁰。ところが、本願寺との戦いのさなか、姉川の合戦で打撃を受けたとはいえ依然勢力を保っていた朝倉、浅井軍が連合して三万の軍勢でもって、反対の湖西側を南下してきた。連合軍は金ヶ崎での信長逃避行を助けた朽木元綱を蹴散ら



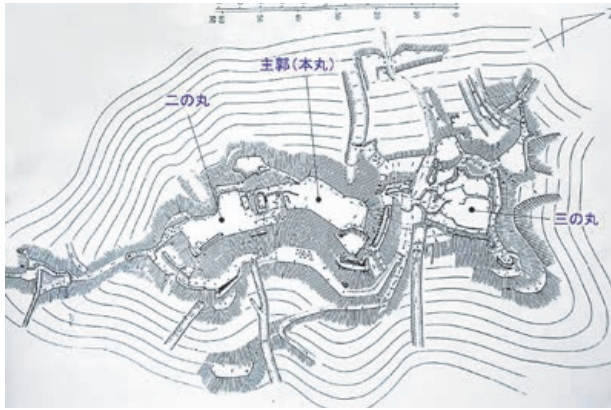
長浜城（長浜市 羽柴秀吉ゆかりの城であるが大坂の陣以降に廃城となり、現在のものは1983年に伏見城などを参考に作られた模擬城。歴史博物館として使用されている。）



琵琶湖周辺の城の配置と志賀の陣における朝倉・浅井軍の動き

し、湖南端の要所宇佐山城を攻撃・突破したあと、遂に京に入った。信長は野田・福島の戦線を切り上げるとともに、柴田勝家、明智光秀らを京に急行させてこれに対峙させた。信長軍の意外に迅速な対応に、朝倉、浅井軍は不入の地である比叡山に駆け上がり、以後三か月にわたる睨み合いが始まった。比叡山延暦寺は、朝倉家が大檀家でその軍勢の闖入を拒まず、信長からのあの手この手の懐柔策にも乗らなかった。この状態は、あちこちに「仕掛かり」を残し戦線が伸び切っている信長軍にとっては、身動きのつかない極めて危ういものであった。山の上の勢力は頑えないし、あまつさえ途中で切り上げてきた石山本願寺、三好勢が虎視眈々と背後を覗っていた。信長としては何としてもこの「反織田包圍網とのきわどい膠着局面」を打開し、包圍網の解消と戦

20) 信長は事実上天下人になっても京には本拠を置かず、安土城を拠点とした。意外に注目されないが、京は攻めるに易く守りに難い地。ここに本拠を置かないのは、自由度の高い覇権構想としては慧眼(けいがん)。さらに、彼は頻りに拠点を移した武将であるが、安土に移ってから岐阜との行き来の確保には、織田家として気を配った。何故なら、安土城は彼独特の世界観を体現するもので、安土城は信長の城ではあっても、織田宗家の城ではなかった。因みに、信長は安土城に移った後、信忠に家督と岐阜城を譲っており、織田宗家の居城は依然として岐阜城であって、そこの導線確保は格別に重要であった。岐阜から安土、京への連絡ルートを確実にするための湖東から湖南までの配置は、北から順番に、横山城・長浜城(羽柴秀吉)、佐和山城(丹羽長秀)、安土城(中川重政・但し後に信長が築城した天守閣とは別のモノ)、永原城(佐久間信盛)、長光寺城(柴田勝家)、宇佐山城(森可成のちに明智光秀)である。宇佐山城は、京への入り口として重視され、畿内で初めて瓦吹き屋根を用い石垣を堅牢に積み上げた城として、森可成(もりよしなり)が築城したもので、志賀の陣においては最大の戦場となった。朝倉、浅井軍はここを突破し、大津、山科などに放火しながら京に乱入した。打って出た守将森可成、織田信治はじめ主だった将は討死したが、城に籠った家老以下がよく凌ぎきり最後まで落城しなかった。のちに光秀に与えられたが、彼が坂本に築城して移った際に廃城となった。



宇佐山城址縄張図(滋賀県中世城郭調査書より)



宇佐山城址(大津市 志賀の陣の激戦地)

線の立て直しを図る必要があった。信長が最後に頼ったのが、朝廷による「和睦の綸旨」。さすがにそれを「出せ、出せない、或いは出させない」を巡って関係勢力間で政治力を駆使した紆余曲折があったが、出た綸旨の威力は絶大。これにより勅命講和が成立し、勢力がそれぞれに撤退して、信長は一大窮地を脱することができたのである²¹⁾。

最後に、③「喧嘩の仕方は俺が決めるから手下はその通りやればよい」についてである。

当時の武士社会は、「一族郎党の塊」がより上位との支配関係の中で縦の秩序を形成して臣従するというイメージであり、小さな領域の小領主のヒエラルキーならそれで事足りる。しかし、急速に日本の半分ほどの地域を支配するに至った信長政権においては、特別の「機能中心の機動的軍制」秩序を採用した。

彼の軍制秩序を大まかにいうと、大元帥たる彼の下、方面部隊司令官クラスを都度柔軟に担当地域に張り付け、それに与力という信長直臣ではあるが特

定の武将の指揮下に入るお助け人材と兵力を付けるというもの。その意味では、方面部隊というのはその都度カセットのように構成、編成の替わる旅団というイメージに近い。そして、戦いの現場の戦術指揮こそ方面司令官に授権するが、戦略・作戦、司令官の発令、与力の配置などは、信長が自ら縦横無尽に采配した²²⁾。

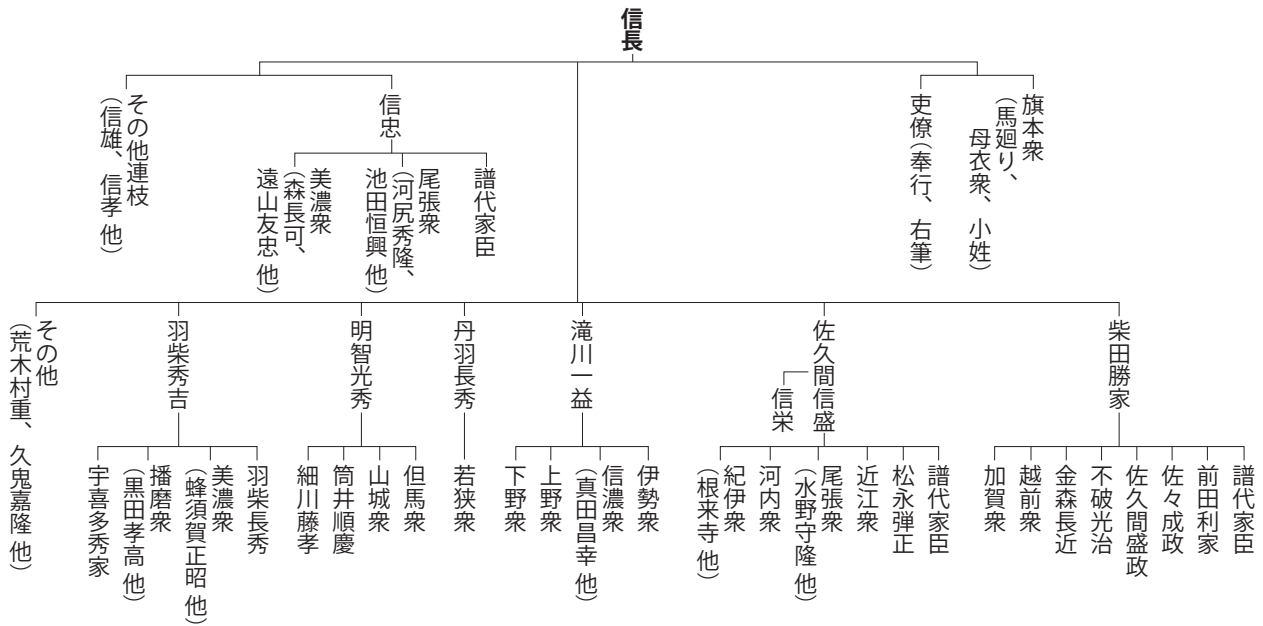
あとは、総司令部である自らの身邊に比較的少数の所謂秘書官グループである馬廻り、小姓勢をおいた。総司令部と言っても戦略構想はほとんど信長の頭脳の中だけで決めたから、いわば大元帥が参謀総長を兼務した状態であった。小姓たちは専ら信長の日常の便宜と警護を旨とし、加えて俄かに発せられる下知の伝令(発信)を担った²³⁾。よって、大元帥たる彼の周辺は頭脳組織体を機能せしめる最小限の出立ちで、もともとコンパクトであった。

信長は調略は自ら考え、戦いにおいても最後まで作戦を明かさなかった。忍者対策の面もあったろう

21) 一時の危機は凌いだが、信長はこれで取めるつもりは毛頭なく、そののち捲土重来で朝倉、浅井討伐、比叡山焼き討ちへと動いたのは周知の通り。なお、石山本願寺との戦いはその後も続いたが、石山から本願寺が退去するという最終講和にも朝廷が介在している。宗門との関係での朝廷の権威を窺わせる。

22) 作戦を他者には一切任せないで、一人だけで考え抜いた有力武将の他の例としては、上杉謙信が挙げられる。戦いの前になると毘沙門堂(びしゃもんどう)に一人だけ籠って、何日もかけてとことん展開と用兵法を詰めたといわれる。

23) 信長はその言葉(語録)があまり多く残っていない武将である。頭脳明晰ではあるが、言語で丁寧にそれを他者に伝えることに意を用いたとは思われない。説明するより先に身体が動き出すタイプである。トップの意向を「付度(そんたく)し、噛み砕いて組織に行き渡らせる」伝達掛(使番)の役割は、彼の場合には想像以上に大きかったのではあるまいか。本部伝令とは別に、戦場において本陣と前線を行き来する使番(伝令)に「母衣武者(ほろむしゃ)」という者が居る。母衣というのは、長い縦に縫い合わせた布を、首、兜、手などに結び付け、それが騎乗で風をはらんで膨らむのを利用して、弓矢、投石を防ぐように工夫したもの。母衣衆は有望な馬廻りの中から選ばれることが多く、情報将校という性格上、平時の近習とも一部重なる。信長の黒母衣衆、赤母衣衆には前田利家、佐々成政などのほか、桶狭間の殊勲者毛利新介や塙直政、中川重政もその一員であったことがある。いわば近衛エリート名誉集団で、軍装も華やかであった。秀吉の黄母衣衆はこれを真似たもの。母衣武者には格別の敬意が払われ、仮に討ち取られてもその首級は鄭重に扱うのが当時のマナーであり、無闇にこれを晒したりする不心得者には祟(たた)りがあるとされた。



方面部隊司令官

(時期によりかなりの出入りはあるが、「信長軍」の部隊司令官編成のイメージを大まかに示したもの)

が、自らの卓越した作戦構想力への自信のなせるものであった。また、後から仕官した者も含め各自の得意分野を生かした登用をして、手足として各部局に嵌め込んでいる。但し、「命令する頭脳」は「働く身体」とは別であって一緒である必要はなく、むしろ頭脳は「浮かぶように」自由で身軽が良いと考えていた節がある。しかも、桶狭間以降、彼は常に「攻める側」であって、防御の発想に乏しい。「膨張する征服軍団」特有の発想であり、一方向での効率重視のフォーメーションである。事実、その軍制、構想指揮は、他を圧倒して顕著な成果を上げていた。

……が、しかし、先に「仮に負けても決定的な負け方(致命的な敗北)はしていない」とは云ったものの、やはり本能寺の変を避けて通るわけにはいくまい。まさに致命的で滅びの事件ではあるが、一瞬の構えの虚(軍事的空白)を衝かれたというものであって、能動的な策略とか作戦の失敗というものではない。しかし、だからと言って、彼の流儀とは別ということにはならない。何故あの時に光秀が拳に及んだのかについては、たくさんの考察があって、素人の出る幕ではない。むしろ、信長があの時期にどうして無防備にも寡勢で本能寺に寄宿していたのが肝要。

本稿の趣旨に照らせば、これも信長の戦いの流儀のなせるところであったと言わざるをえない。既に東海から甲信、北陸、畿内を切り従え、周辺の潜在的脅威を排除して、あとは中国、四国、九州を残すのみという局面であった。これらの方面にも目いっぱい打ち手を着々と展開しているさなかの「攻めの身軽な司令部」は、味方の勢力圏内に安心して「浮かんでいた」のである。その時、明智勢は各地に展開する部隊司令官の事実上最後の駒として、下知を受けて亀山城から肅々と備中方面に動くことになっ



本能寺址(京都市中京区)



本能寺の変における明智軍の足どり (推定)

ていた²⁴⁾。光秀はこの一瞬の軍事的空白を咎たのであるが、信長にしてみれば、空白を作ったという意識はなかったであろう。まさか、指令に従うだけの筈の手駒が急に意思を持った^{いけん}り、況や手足の筈の部隊が頭脳からの指示を蔑ろにし、勝手に行先、動きを違えて、京市中に浮かぶ頭脳組織に対して刃向かってくるなどとは思ってもいなかったのである²⁵⁾。

流儀とは個性である。個性は染みついたものだが、状況は常に変わる。個性は状況に依り、佳くも悪し

くも作用する。

信長は、その流儀によって大成功を収め、そしてその流儀によって滅んだのである。まさに、「是非に及ばず」であった。この科白は、本能寺で光秀の謀叛を知った時の信長の言葉とされる。その解釈には諸説あるが²⁶⁾、筆者としては「こうなったのも己の流儀ゆえ、仕方がない」との意味あい^{つぶや}に解し、彼がそう呟いてニヤリとしたという気がしてならない。



二条御所址 (京都市中京区御池通から両替商通を上った処に址標だけが残る。近くに「世界漫画ミュージアム」があるのが何故か微笑ましい。)

阿弥陀寺 (京都市上京区 信長・信忠父子及び森三兄弟討死衆の墓所である。織田家と親交のあった清玉上人が、本能寺の変に際し本能寺、二条御所などに駆けつけ遺骸を収めてこの寺に埋葬したとされる。)

- 24) 本能寺の変の直前、京の周辺に駐在していた纏(まと)まった軍勢は、織田信雄軍、織田信孝・丹羽長秀軍、それに安土の留守居役(蒲生氏郷ら)くらいである。身内ばかりであり、このうち信孝・長秀軍は既に四国攻略を命じられて準備に余念がなかった。光秀は安土での家康響應役を免じられて、中国の毛利に対峙していた秀吉の側面支援の意味も兼ねて、急遽山陰調略に向かうことになっていた。この間の慌ただしい動きについては、響應の不備を信長から叱責されたからであるとか、上記(注17)のような不満や室町将軍による旧秩序への復帰目的などを謀叛(むぼん)の引き金とする説があるも、ここではこれ以上立ち入らない。
- なお、本文に「本能寺に寄宿」と書いたが、寄宿とは少人数で泊まることを言い、大人数による「陣取(じんどり)」と区別される。また、偶々(たまたま)その折に本能寺を宿舎にしたということでもない。軍勢が進出した地の寺社にとって、宿舎に擬されるのは迷惑なこと。況や狭い京の町ではなおさら。寺社では予め進出する武家に対し金銭提供など誼(よしみ)を通じ「陣取禁止の触れ」を出して貰うことが行われていた。本能寺も、当初は信長の陣取を拒んでいたが、他の軍勢の陣取の禁止と引き換えに、変の二年前から信長の定宿となり、村井貞勝が普請を加えて、京における「信長の屋敷」化していた。よって、然るべき構えは有してはいたが、少人数の収容を前提にしたものであった。
- 25) 亀山城から本能寺までの経路については、実はよく分かっていない。備中へは、本来は西の三草山方面に向かうのが自然。本隊は摂津方面を経由すると称して老ノ坂に向かい、大よそ図のようなルートを辿ったとされるが、夜間とはいえ1万3千の軍勢はさすがに目立つため、途中幾つかに分散して行軍したと考えられる。杳掛を経て桂川を渡河した辺りで、全軍に真意を明かし有名な「敵は本能寺にあり」と述べたことになっているが、信長公記などに記載がなく、江戸期の頼山陽の著作における創作とされる。
- 26) 信長公記には「是れは謀叛歟、如何なる者の企てぞと御謎の処に、森乱申す様に、明智が者と見え申候と言上候へば、是非に及ばずと上意候。」とある。他の解釈としては、「緻密周到な光秀の仕組んだことなら逃れることは出来ない」とも、「(火急のことゆえ防御対応をどうするかを)あれこれ考えている場合ではない」ともとれる。文中の「上意候」とは下知(指示)の様にもとれるから、その点を重視すると、後者のニュアンスに近いのかもしれない。因みに、金ヶ崎で浅井の裏切りを聞いた時にも同様な科白を口にしたと伝えられており、なんとか打開するという意向が滲(にじ)んで、「仕方がない」感は薄いのかもかもしれないが、状況が異なるから一概には言えない。なお、信長公記の記事にこの科白が残ったのは、本能寺で信長の身の回りの世話をしていた女房衆から、太田牛一が信長最期の様子を爾後に聞き取れたからである(「女どもこの時まで居申して、様躰見申し候と物語候」)。ギリギリ最後まで本能寺に留まり、その後信長によって放たれ逃れ出られた女房衆はかなりの数いたのであり、また本能寺から信忠のいる妙覚寺に異変を知らせる伝令も難なく到達している。素人的には「一人くらい、(女性の衣を被ってでも)逃げようと思えば出来たのではないか。信忠にしても、改めて二条城なんか立て籠らざささと逃げればよかったのに。」と思ったりもするが、絶対必死の状況下での判断として「雑兵の手にかかるより、名誉の自裁を選ぶ」ということであつたらうか。なお、ここで云う二条城は、むろん現在のそれではない。信長が自らのために造り、のちに誠仁(さねひと)親王に譲った城館で、二条御所(又は下御所)と称されていたもの。本能寺の変の折、親王も二条御所に居られたが、村井貞勝と取り囲んだ明智勢との事前交渉により、直前に逃れ出られている。